

どんぐりをプレゼントしたトナカイ —発達障害児にとっての意味のある作業とは— The reindeer who gave out acorns

—the meaningful occupation for children with developmental disabilities—

○田中涼子 (OT), 太田篤志 (OT)
株式会社アニマシオンプレイジム

Key words: 発達障害, 意味のある作業, 役割

【はじめに】今回、運動発達の未熟さと学業に困難さを持つ症例を担当した。当初は自信の無さからくるネガティブな発言や運動課題に対する受身的な姿勢が見られたが、本人にとって「意味のある作業」を見出してからは、運動課題に対する積極的な姿勢が見られるようになった。尚、本報告に際して本人と保護者より同意を得ている。

【目的】事例検討を通して、本人にとっての「意味のある作業」がもたらす効果について報告する。

【症例紹介】知的障害, ADHD, 広汎性発達障害を併せ持つ小学3年男児。軽度筋緊張低下により、立位、坐位ともに姿勢の崩れが顕著である。四つ這いでは体幹筋や上肢筋の同時収縮が得られず、傾斜では容易に姿勢が崩れる。周囲からの刺激により注意散漫になりやすい。爪噛み等の感覚探求行動が見られる。療育手帳B1。NC発達プログラムでの発達年齢は視覚操作4歳, 言語理解・表出5歳, 粗大運動は5歳(片足跳びに芽生え反応), 巧緻動作は4歳程度である。サッカーや野球などスポーツは好きだが、疲れやすく持続して遊ぶことは困難である。

今回、運動遊びを通して、全身のバランス、協調運動スキルの向上を目指すという支援方針を立て、作業療法介入を実施した。

【介入方法】X年4月に介入開始、介入当初は本児の好きなスポーツを絡めた片足跳び遊びを提供したが、スポーツのイメージが本児とOTRが考えるもので相違があったため、夢中になって遊びこむまではいかなかった。運動スキルは、片足跳び4m前進、片足立ち4秒などスコアの上昇も見られたが、全体的に与えられた遊びを行う受身的な態度であった。X年10月末、体幹筋や上下肢筋の安定性向上のため四つ這いでの遊びを重点的に行う指導方針に変更する。クリスマスパーティーの話題になった際、作業療法士(以下OTR)が発した「トナカイになる？」の一言で、本児がこれまでにないほど意欲を持って四つ這い遊びに取り組み始める。四つ這いでは手指軽度屈曲のため手掌が床に接地していなかったが「手をしっかりついて踏ん張らないと皆のプレゼントを運べないよ」とアドバイスをすると、手を開こうと意識するようになる。「猫」から始まり、「犬」、「修行中のトナカイ」、「一人前のトナカイ」と段階づけした。クリスマスパーティーの当日、本児が「これをみんなにプレゼントする」と袋いっぱいのだんぐりを持参した。この日のために公園で拾って集めていたという。自分で作ったトナカイの仮装とソリを持ってサンタクロース役のOTRと登場し、普段交流のないデイの友だちにどんぐりをプレゼントした。

【結果】姿勢保持機能の向上や全身のバランス機能の向上などが見られた。しかし、この作業を通して一番の変化は本児の精悍な顔つきが物語っている。数値には示されないが、運動課題への積極的な姿勢、OTRからの指示をしっかりと聞く様子、諦めず継続する力は重要な変化である。

【考察】今回の症例を通して、本人が作業の中に自分にとっての意味を見出し、その作業を通して獲得される「役割」が重要であると感じた。「トナカイになってプレゼントを配りたい」という本児の役割意識が、自らの考えでどんぐりを拾ってくるという行動に繋がった。そして役割を持つ中で責任感も生まれ、引き締まった表情として表れたのだと考える。

また、本児とOTRとの共通した作業の目標を見出すことができたことが今回の支援のポイントだと感じた。知的障害や発達障害を持つ子どもたちにとって意味のある作業を見つける際には、その子たちの持つ作業のイメージを丁寧に見極めて、子どもと何度も確認しながら共通した目標を立てることが重要であると考えます。